



お茶の京都

Discover
Premium
Green

「空中茶室」シンポジウム 資料集

平成30年1月21日(日)

主催 八幡市(商工観光課)
後援 歴史街道推進協議会

「空中茶室」シンポジウム

～昭乗×遠州の八幡で生まれた茶文化を今に伝える～

平成30年(2018)1月21日(日)
八幡市文化センター 小ホール

◆プログラム◆

13:30 開会あいさつ 八幡市長 堀口 文昭

13:35～13:40 趣旨説明

【基調講演】

13:40～14:30 世界を旅する茶室「空中茶室」～時間×空間のトポロジー～
東京藝術大学教授 北川原 温

14:30～14:45 休 憩

【パネルディスカッション】

14:45～16:00

[コーディネーター] 信州大学特任教授・地域活性学会会長 中嶋 聞多

[パネラー] 東京藝術大学教授 北川原 温

京都工芸繊維大学名誉教授・松花堂美術館学芸顧問 日向 進

東北福祉大学教授・石清水八幡宮研究所主任研究員 鍛代 敏雄

元(公財)京都市埋蔵文化財研究所 主任研究員 小森 俊寛

[ゲスト] 石清水八幡宮宮司 田中 恆清

16:00 閉 会

◆同日開催◆

【空中茶室「閑雲軒」跡 現地説明会】

10:30～11:30 講師：小森 俊寛

◆同時開催◆

【宇治茶のふるまい・販売】

シンポジウムの前後に、お茶の京都プレミアム茶のふるまい、販売を行います。

主催：お茶の京都博実行委員会

◆目次◆

東京藝大北川原研究室×八幡市 空中茶室「そら」資料	1
小森 俊寛 氏 資料	2
鍛代 敏雄 氏 資料	6
日向 進 氏 資料	13
参考資料（1）空中茶室「閑雲軒」ゆかりの地をめぐる	15
参考資料（2）八幡市駅前整備等観光まちづくり構想（抜粋）	20

◆紹介◆

北川原 温（きたがわら あつし）

1951年生まれ。東京藝術大学教授。建築設計、都市計画の分野において数多くの実績があり、2005年ベルリンにヨーロッパ事務所を開設、2015年ミラノ万博日本館（120か国以上が参加。日本が史上初の金賞受賞）の建築プロデューサーを務めるなど国際的にも活躍する一方、裏千家国際茶道文化協会の茶室「宙軒」を設計するなど伝統に革新をもたらす活動も行う。母校の東京藝術大学教授として教鞭をとりながら、公共・民間の多くのプロジェクトに参加、日本を代表する建築家の一人として知られ、日本建築学会賞、日本建築大賞、村野藤吾賞、アルカシア賞ゴールドメダル、アメリカンアーキテクチャープライズ金賞、日本芸術院賞などを受賞している。

日向 進（ひゅうがすすむ）

1947年生まれ。京都工芸繊維大学名誉教授。工学博士。八幡市立松花堂美術館学芸顧問、茶の湯文化学会理事。専門は日本建築史。主な著作は『近世京都の町・町家・町家大工』（思文閣出版）、『茶室に学ぶ 日本建築の粋』（淡交社）など。「特定非営利活動法人 古材文化の会」の会長として古建築や古材の保存と活用にも取り組む。

鍛代 敏雄（きたい としお）

1959年生まれ。東北福祉大学教育学部教授。博士（歴史学）。専門は日本中世史。社会史、宗教史、思想史、商業史、交通史など多岐にわたる。主な著作は『中世後期の寺社と経済』（思文閣出版）『神国論の系譜』（法藏館）『戦国期の石清水と本願寺』（法藏館）『敗者の日本史11 中世日本の勝者と敗者』（吉川弘文館）『戦国大名の正体』（中公新書）など。國學院大學大学院客員教授・東洋大学大学院兼任講師を歴任。現在、石清水八幡宮研究所主任研究員を兼任する。

小森 俊寛（こもり としひろ）

1949年生まれ。専門は考古学。（公財）京都市埋蔵文化財研究所主任研究員として京都の発掘調査や土器・陶磁器の編年研究を行う。2010年から八幡市教育委員会文化財保護課主幹として石清水八幡宮境内の発掘調査を担当。主な著作は『桂離宮茶室等整備記録』（共著・宮内庁）、『平安京提要』（共著・角川書店）、『京から出土する土器の編年的研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』（京都編集工房）、『石清水八幡宮境内発掘調査報告書』（共著・八幡市教育委員会）など。

ゲスト

田中 恆清（たなか つねきよ）

1944年生まれ。石清水八幡宮宮司、神社本庁総長、京都府神社庁長、世界連邦日本宗教委員会会長。一般社団法人八幡市観光協会理事長。1972年より、かつて空中茶室「閑雲軒」があった男山に鎮座する石清水八幡宮に奉職しており、2001年に宮司に就任する。主な著作は『神様が教えてくれた幸運の習慣』（幻冬舎）、『謎多き神 八幡様のすべて』（新人物往来社）など。

コーディネーター

中嶋 聞多（なかじま もんた）

1954年生まれ。信州大学特任教授、（一財）地域活性機構理事長。専門は応用情報学。とくに近年は、地域活性（地方創生）の理論と方法、地域ブランド、地域イノベーションなどの研究に取り組む。主な著作は『情報システム学への誘い』（培風館）、『飛耳長目—信州の成功企業を読み解く—』（信濃毎日新聞社）など。2017年10月より第3代地域活性学会会長に就任。北海道から沖縄まで、全国の地域活性化支援に取り組んでいる。



東京藝術大学 北川原研究室 × 八幡市 新・空中茶室「そら」

八幡市・石清水八幡宮の山腹に、「閑雲軒」という世にも珍しい茶室がありました。松花堂昭乗が小堀遠州と共に作ったその茶室は、空中に迫り出す懸け造り。その新奇性を現代に再現するべく、折り紙の構造を用いた全く新しい形の茶室を提案します。

東京藝大 北川原研究室×八幡市 空中茶室「そら」

新「閑雲軒」としての茶室「そら」

閑雲軒は江戸前期に茶人である小堀遠州が手掛けた茶室で、石清水八幡宮（京都府八幡市）にあったものです。発掘調査で判明したのは山腹の崖面にせり出した「懸け作り（かけづくり）」で、その姿は「空中茶室」ともいうべきものでした。現在、遺構のみ残るこの茶室から、当時の精神性を受け継いで制作した「現代版 空中茶室」です。

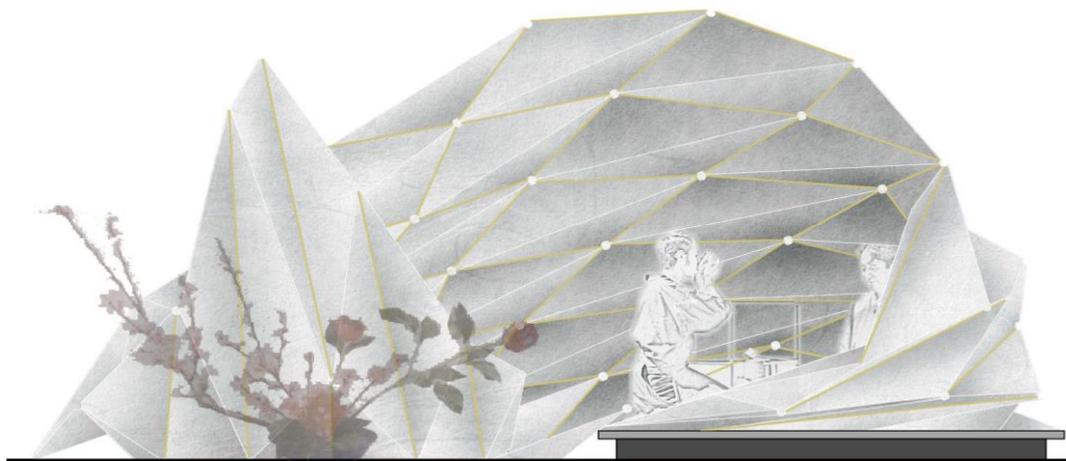
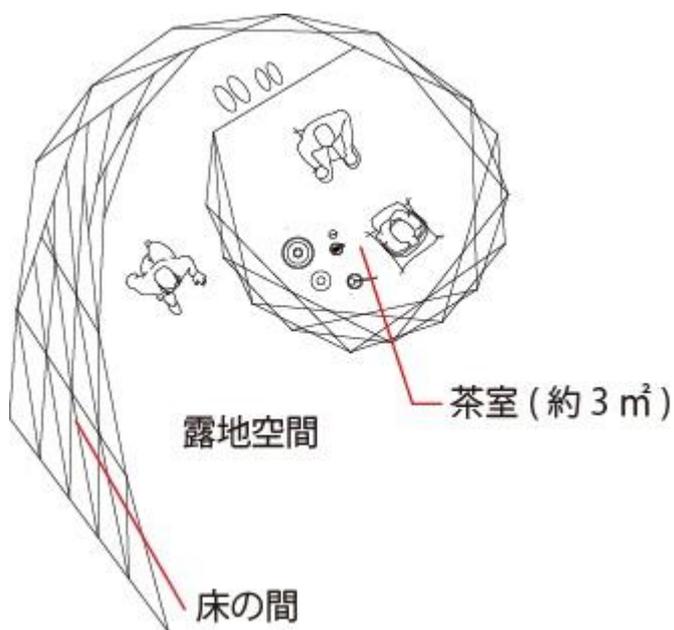


丹頂鶴や牡丹の花の「花鳥風月」や「幽玄」のような日本の美意識の原点である華やかさを表現しています。

「現代版 空中茶室」とは

「閑雲軒」は「懸け作り」からの景色と、あたかも空中を歩くような浮遊感を感じさせる「遊び心とおもてなし精神」を感じさせるものであり、また、遠州が発展させた「わびさび」に、美しさと豊かさを調和した「綺麗さび」の精神が含まれているのかもしれません。

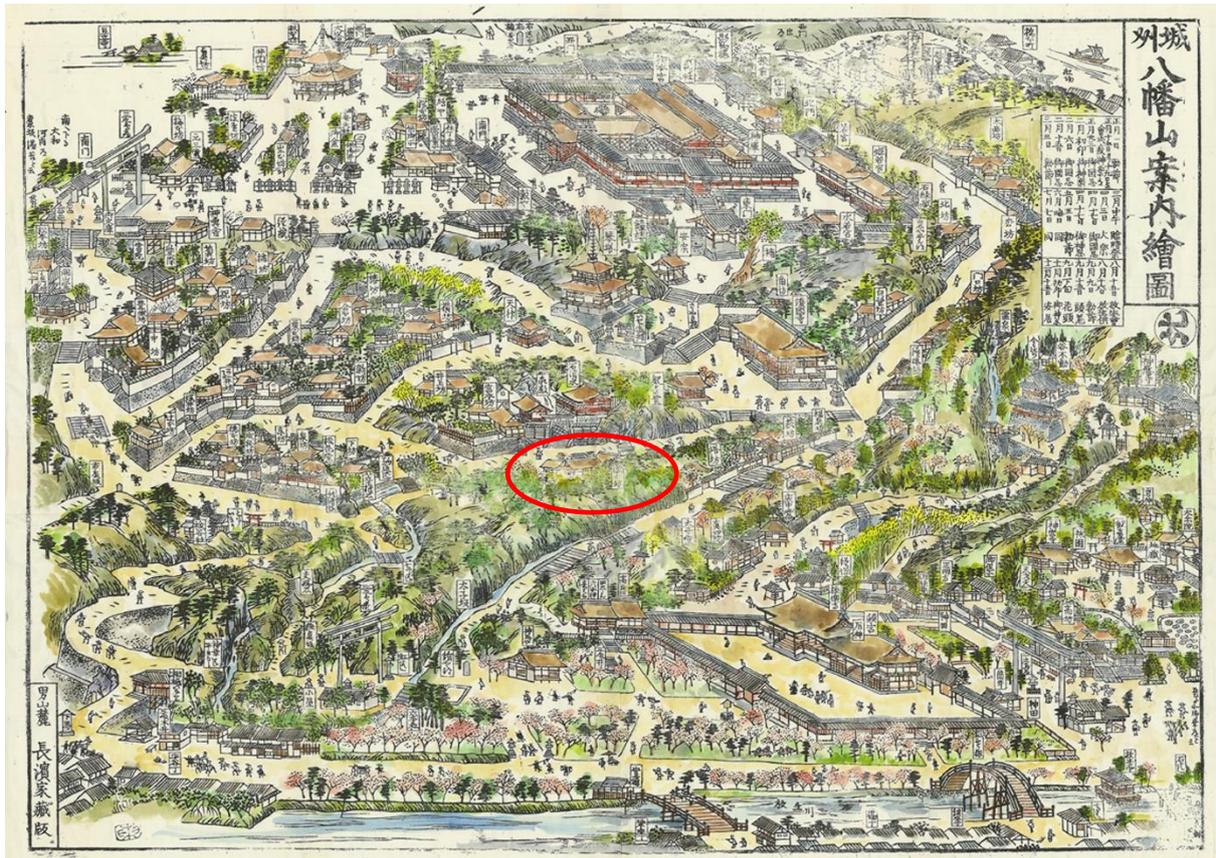
この現代版は、遠州や昭乗が感じた「あたかも空中を漂うような情景」と、彼らが伝えようとした「おもてなしの精神」を、「時間」と「空間」を超えて、表現しようとしたものです。地面にずっしりと構える茶室ではなく、異文化交流の場であった茶室を、手軽に持ち運び可能な仕組みにすることで、世界中のどこにでも「おもてなしの空間」を展開できるようにしています。さらには、持ち運びや収納のしやすさに優れた提灯や和傘の「折り」「素材」「構造」を参考にしながら、シンプルであるが華やかに開く仕組みとしています。



1. 瀧本坊 閑雲軒跡の調査

(小森 俊寛 氏資料)

平成 22 年 11 月 6 日石清水八幡宮境内範囲確認調査現地説明会資料（八幡市教育委員会発行）より坊とは 明治の神仏分離まで、石清水八幡宮は「八幡大菩薩」をまつる神仏習合の宮寺でした。検校、別当といわれた長官や重職は僧侶が占めていたのです。これらの僧侶が居住したのが「坊」で、坊ごとに本堂を構え本尊を祀り、貴族や大名の祈祷を行っていました。石清水の坊舎は江戸時代には「男山四十八坊」と称されるほど多く、男山東斜面に坊舎が立ち並んでいるようすは数々の絵図に描かれています。



図① 城州八幡山案内絵図（慶長 2 年・1866 年）に着色。赤丸が瀧本坊。

瀧本坊の歴史 史料で瀧本坊の存在が初めて確認できるのは、長禄 2 年(1458)の足利將軍義政の参詣の記事です。室町時代には、瀧本坊の僧は御殿司という重職に就いています。明治初年の石高はおよそ 92 石で、徳川家祈願所の豊蔵坊、足利家祈願所の橋本坊、横坊に次いで 4 番目の高さを誇ります。(田中君於「男山四十八坊」『文化燦燦』第二号 平成 11 年)。

江戸時代前期に活躍したいわゆる寛永の三筆の一人、松花堂昭乗の住坊として著名で、昭乗の代に名器名書を集め、当時その名は四方に聞こえました。そこには、寛永年中に昭乗が小堀遠州と共につくったという茶室・閑雲軒がありました(『男山考古録』)。

昭乗の没後 135 年程たった安永 2 年(1773)、栗本坊と共に焼失します。再建後のようすは、『男山考古録』に「九条殿より拝領の玄関が南にあり、正面玄関は別にある。本堂は門内の南。奥の小書院は小堀遠州好みで、旧松坊のものを移したものである。」との記載があります。安永 2 年(1773)の火災後、『男山考古録』によると閑雲軒は再建されなかったようです。

松花堂昭乗 天正 12 年(1584)頃の生まれと一説にいい、没年は寛永 16(1639)。『中沼家譜』によると摂津国、堺の出身ですが、別説もあります。阿闍梨法印の位を与えられ、1627(寛永 4)瀧本

坊の住職となります。書は青蓮院流と大師流を学び、松花堂流または瀧本流の祖です。画は狩野山楽に学んだと伝えられ、著彩・水墨画ともに名作を残します。隠居後、寛永14年(1637)に瀧本坊の南、泉坊に草庵を建て、これを松花堂と号しました。別号は惺々翁といます。

瀧本坊は乗淳、憲乗、乗円とうけつがれ、彼らもまた書、画技に長じて代々松花堂(流)を名乗りました。昭乗の水墨画は茶席でことに重んじられますが、茶人として名高い小堀遠州らとの交わりの中で茶をみがいたといい、遠州と並んで茶道大成者の一人に数えられます。公家や文人を招いた松花堂の茶会と交友のようすは『松花堂茶会記』に詳しく伝えられています。

閑雲軒 『男山考古録』には、「客殿より北に鳴門の間、鳩の間等があり、客殿と北の奥鳴門の間(12帖)との続き軒合わせの取合の所に、一間半四方の一室を閑雲軒としていた。外はすべて廣縁に板間続きであった。」との記載があります。茶室と書院の名声は高く、後代の茶人らが瀧本坊での茶会記や見取り図を書き残しているほか、旧徳川家所蔵の起こし絵図(組み立て式の建築図面で茶室のしつらえなど説明するために江戸時代に盛んに作られた)にも、絵図が残されています。

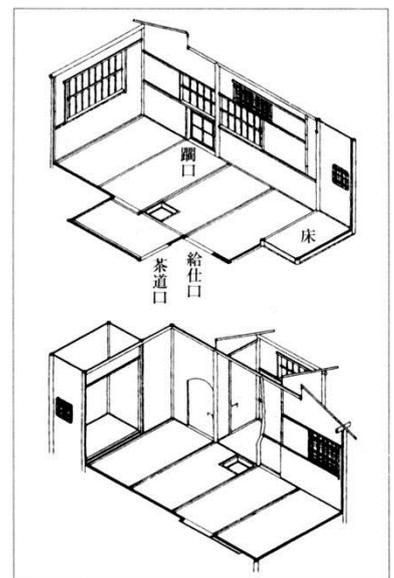
中村昌生氏(京都工芸繊維大学名誉教授・松花堂美術館名誉館長)は次のように述べておられます。

両方に開かれた大門から玄関へ、玄関から南へ板間で、南面する客殿に通じる。南側の縁に面して松の間と花鳥之間が並び、花鳥之間の北室に違棚と畳床が設けられている。

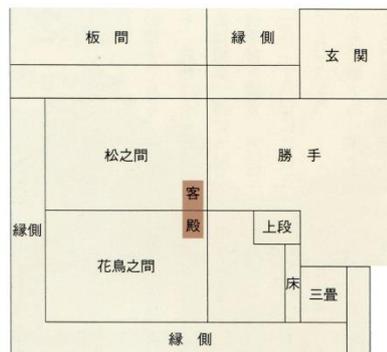
客殿東側の縁の北端から東南へ約五十度斜めに縁が向かい、それに沿って東側に四畳台目の数寄屋がつくられていた。斜面に建ち掛け造りになって支えられていた。(中略)この開け放たれた縁が、茶室「閑雲軒」の露地である。客殿上段のある座敷の北に手水の間があり、縁先に遠州好みの手水鉢を据え、庭には小石を敷き飛石が打たれていた。「此縁つたいの内二雪隠有」と記され、建物に挟まれたこの坪庭に露地の設備がまとめられていた。縁は手摺りが廻り両戸だけで吹き放しであった。この縁には茶会の時、飛石のように毛氈を敷いた。眼下に絶景を望みながら茶室に向かう道は、縁伝いでも野外に行くのと変わらぬ気分誘われたに違いない。(中略)

この茶室の後方の勝手から、東北へ書院棟が連なっていた。勝手から手摺りを設けた板縁が延び、それに面して書院が建てられていて、最初の座敷「鳴門之間」は十二畳程、折廻しの上段と一間床がある。次は二室続きの書院で楽翁の起こし絵図にあり、奥の九畳が「上之間」手前の九畳が「下之間」と呼ばれていた。(中略)さらに奥、一間の鞘の間を隔てて「茶立所」と称された座敷があった。(中略)茶立所なる故に、先の二間続きの書院とは異なり、書院造りの硬さをやわらげる意匠や構成の工夫がこらされたのであろう。

しかしながら、上・下之間も茶立所も、飾りの場所の豊富さは変わらない。会記には「振舞広間 茶斗すきや」と記されている場所もあるが、広間でも茶がすすめられることはあったし、目を眩らせる書院がどのように使われたかを知りたいものである。(下略)【『別冊太陽 日本このころ 160 小堀遠州』平凡社 2009年】



図② 遠州四畳台目復元図 (中村昌生『茶室を読む』淡交社 2002年)



瀧本坊の客殿・数寄屋・書院の配置略図

茶友である昭乗のために遠州が数寄屋や書院を設計した。本図は延享3(1746)年の茶会記(木津家蔵)の図により作成。諸室のおよその配置を示す。



図③ 瀧本坊配置図『別冊太陽 日本このころ 160 小堀遠州』付図

調査状況 江戸末期の遺構残存状況の把握を主目的とした確認調査を行いました。調査地は平面上で 298 m²、斜面は約 900 m²です。南北に細長い平坦地の中央にある崖下へ通じる坂道を境に、北区と南区に分けて設定しました。

非常に良好な遺存状態で遺構を検出しました。火災の顕著な痕跡は見られず、平坦面の上で検出した遺構は、1773 年に焼失後再建された建物跡群と考えられます。南区では江戸時代前期同様の間取りの建物があったようですが、北区は昭乗の頃と様相が異なり、中央に池、西側に漆喰土間の小区画等があり、池のすぐ東には建物があった可能性が高いとみています。

ところが、寛永期以来の瀧本坊を描いた図をもとに、平坦面下の崖面を点検した結果、数多くの礎石が確認されました。このことから、昭乗と遠州が共につくったという閑雲軒とその北の書院は、床面の多くが崖の斜面に迫り出す「懸け造り」の建物であったことが判明しました。

池跡 北区の平坦面中央で検出した漆喰作りの瓢箪形の泉水であり、長さ南北 5.7m、幅東西 1.5～2m程を測る。北にある取水口も漆喰で作られています。池の周りには堆積岩の大振りな庭石(5基)や、西への踏み石が据えられており、その北・西・南の外周3方には、漆喰作りの幅 0.4m程の溝が廻ります。溝側壁上面には蓋の受け部となる段があり、蓋をして使用する暗渠となっています。

建物遺構・北区 池跡の西では、漆喰土間を含めて 1.8m(1間)程の幅に仕切られた小区画が5軒分検出されました。上部構造の復元は難しいですが、小型な庫裏もしくは簡易な小蔵が建っていたものと見ています。池の南東には南北方向に 3m(10尺)間隔で並ぶ大型の礎石が2基、その間に東柱の小型礎石が1基あり、江戸後期の建物の西限をなすと考えています。

平坦面の東側は急峻な崖面であり、石垣によって3段程の带状テラスが形成されています。1段目带状テラス上面に、南北方向に柱筋が通る礎石列を検出しました。礎石は堆積岩が主で、平坦面を水平に据えた径 40～50cm 前後の大振りなものも多く、現在確認できているものでは、柱間は心々 1.9m を測るものが中心です。「瀧本坊数寄屋図」の1間を6尺とし大きさを復元、出した礎石列にあてはめてみると、これらは書院の部屋の東辺、縁側との間の礎石列となることが判明しました。書院の南に取り付く閑雲軒も、数寄屋図にほぼ合致する位置で3基の礎石が見つかりました。現状の上位平坦面と崖面の関係から見て、閑雲軒はその床面のほとんどが崖の急斜面に迫り出す構造であり、茶室東端の礎石から推定床面までの高低差は約 6.5m を測ります。清水寺の舞台のような構造であり、山岳寺院の仏堂などに類例は見られますが、茶室や書院でのこれほどの比高差のある懸け造りは、ほとんど類例がありません。

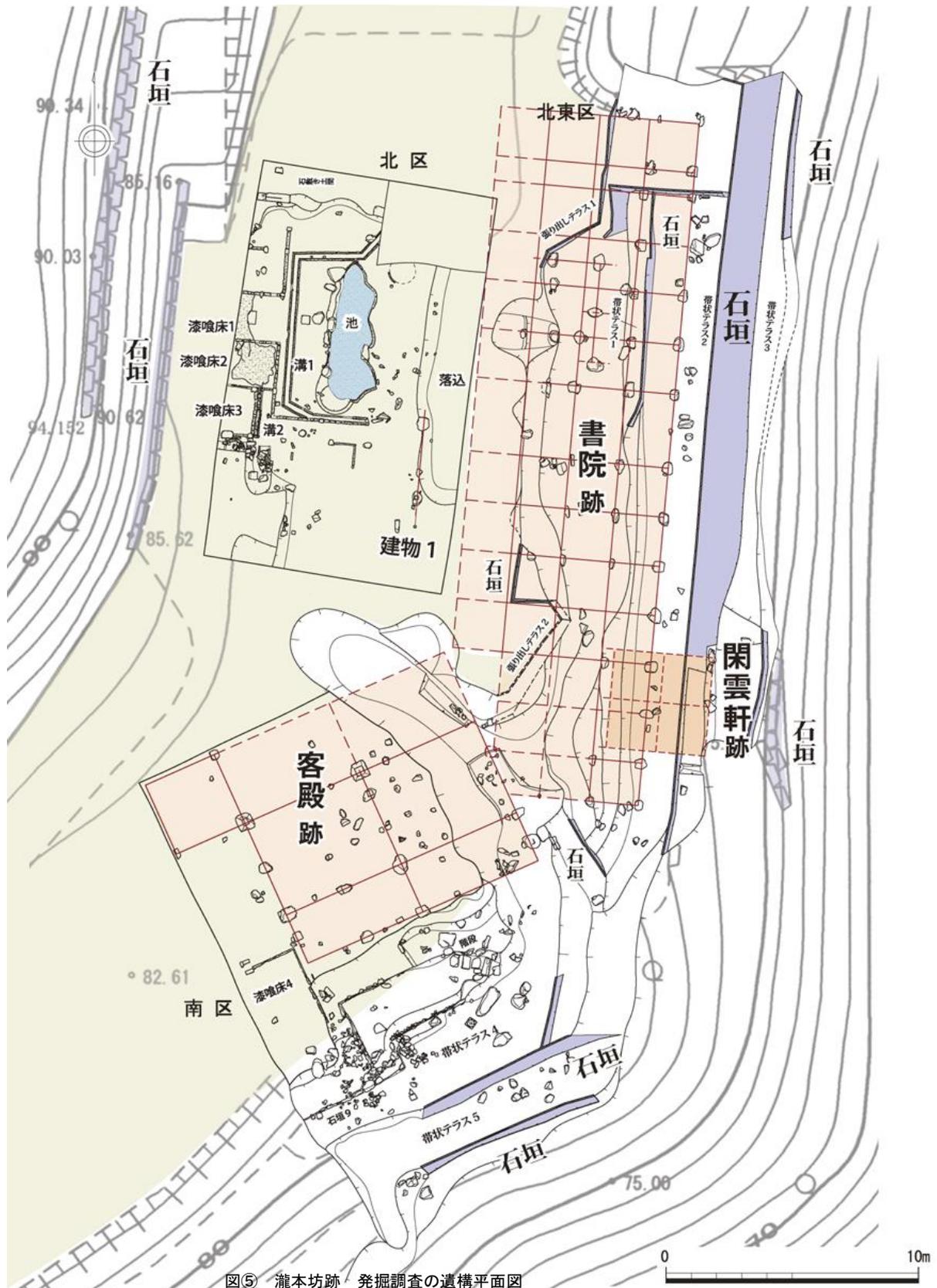
建物遺構・南区 北区の書院と方位が大きく異なり、南東へ大きく振る方位を持つ建物の礎石群を検出しました。礎石列の並びは、南東側崖面にまで延び、下へ降りる階段も見つかりました。

大型の礎石(径 50～80cm)は16基程、小型のものは17基以上検出しました。これらは「瀧本坊数寄屋図」の南部、玄関及び廊下、客間等からなる客殿の間取りにおおむね符合し、南区は焼失



図④ 閑雲軒推定図(八幡市教育委員会作成)

前と同様の配置で再建したものと見られます。玄関や仏間(下図の「板間」)の大半は調査区外ですが、客殿も北と東の縁側はすべて、南東崖面に迫り出す懸け造りであったことがわかりました。寛政7年(1795)銘の瓦が出土しているので、この頃再建されたのでしょうか。



図⑤ 龍本坊跡 発掘調査の遺構平面図

I 「瀧本坊」指図

鍛代 敏雄

- 「瀧本坊茶会記並数寄屋図」(延享3年〈1746〉5月27日四時半<午前11時頃〉 個人蔵)
〔末宗広「瀧本坊数寄屋図に就いて」(『末宗広著作集 I 茶書の研究』思文閣出版、1981年)所収、初出1938年〕

【客殿・書院・数寄屋】

- 1：大門
- 2：玄関
- 3：金張付伶人乃舞乃絵
- 4：板間
- 5：板間へ廻縁
- 6：此所仏間
- 7：板間
- 8：此間杉戸六枚山雪の絵鉢植の図
 - ・山雪
- 9：此間の金襖滝本絵かぢけ松
 - ・滝本坊(昭乗)
- 10：杉戸二枚山雪の唐獅子
 - ・山雪
- 11：此間金欄大流松
- 12：昭乗筆山雪彩色
 - ・昭乗・山雪
- 13：鉄風呂 此所に違棚有、下に鉄風呂ハ山戸 台子の横にして上に棚子
- 14：此間金襖大流松の本木岩組
- 15：此間金襖花鳥の図山雪
 - ・山雪
- 16：宇治の方 不残見へ申候
 - *宇治の景観
- 17：此間懸作高欄
- 18：初此所へ客を案内候、たばこ盆薄茶出候而、坊主ニ引合有
- 19：此所ニ屏風 此間金襖花鳥の図山雪
 - ・山雪
- 20：此所ニ阿欄陀毛氈を敷待合被成
- 21：此間懸作高欄
- 22：此所ニ屏風一双有
- 23：永徳極彩色富士山
 - ・永徳
- 24：かのふ富士五郎書
 - ・(狩野)五郎
- 25：此間惣金極彩色玄宗皇帝の図山楽
 - ・山楽
- 26：上壇の間対面所ニ拝見
- 27：違棚色々有
- 28：小襖小棚有
- 29：時計 此所小襖小棚有
- 30：手水所ニ成
- 31：此所毛氈二枚敷
- 32：手拭掛
- 33：此縁つたひの内ニ雪隠有
- 34：此間の石遠州公作
 - ・遠州
- 35：手水鉢遠州公
 - ・遠州
- 36：物見の窓
- 37：此間懸作高欄
- 38：[] 入
- 39：刀掛
- 40：大目床雅経公懐紙懸
 - ・飛鳥井雅経(1170~1221)
- 41：平四帖^(書)天井こも(菰)
 - 『新古今』撰者)

- 42：大竹かうし此間中かけ也 つき上処
- 43：■ ■ (火灯カ)
- 44：引戸ノ大■ ■窓
- 45：風炉先窓
- 46：此所ハ[]
- 47：[]
- 48：此間勝手
- 49：小棚小襖
- 50：[]
- 51：小床一休の一紙懸 ・一休宗純
- 52：此間■ ■の窓也
- 53：此處遠州の袋棚ニ似たり 上ニいんべの獅子香爐 ・(遠州)
- 54：此處紙本極彩色の三幅対表江 中庭鳥の雌鳥ひよこせなにのる
左雄鳥 右雉子二羽
- 55：此間の張付墨絵山水山楽筆 ・山楽
- 56：板間
- 57：懸作高欄
- 58：此所に書院の様にしてどらを釣 右の柱にばちかけて
- 59：角ニ高棚有 上ニ青貝の箱
- 60：■紙有
- 61：此柱引竹の上板のすかし
- 62：此所ひぢもたせの高さ也
- 63：張柱
- 64：三壇の小襖萩の坊墨絵なり ・萩坊(乗圓)
- 65：此内下壇におヶ敷小棚仕込有
- 66：此所戸袋狗子の絵山雪筆 ・山雪
- 67：此所ある棚のことし手水所と見えたり
- 68：板間
- 69：懸作高欄
- 70：此竜虎屏風滝本墨絵
- 71：此床ニ遠州公壺の文懸 ・滝本坊
・(千利休の「壺の文」)
- 72：大目杉の砂ずり藤ニ而包
- 73：此所ニ硯料紙箱有
- 74：角に丸ニ重釣
- 75：其下ニ硯扇一方銀扇雪舟山水一方者滝本狗子の絵 ・雪舟(1420~1506カ) 滝本坊
- 76：此間張付墨絵山水見事候へ共筆者不知
- 77：此出口の襖滝本の鷹 ・滝本坊
- 78：床ニ冠棚上壇ニ青磁■ ■腰の■ ■の香爐共蓋下ニ推朱の台ニ
碁盤の香箱内ニ名香三種入
- 79：此所雪舟二幅対の寒山十得の筆 ・雪舟
- 80：大目ニ畳上壇
- 81：違棚の出窓
- 82：違棚小襖
- 83：巻物ハ滝本の絵賛嘉右衛門書沢庵江月天祐玉室也
歌書ハとんな(頓阿)玉葉集
- 84：此違棚ニ巻物歌書飴
- 85：此所張付同唐紙じゆくし柿大木を書 三雪筆
- 86：此間の張付対唐紙岩波あわき色也

- 87：此床狗子の絵筆者ハ玉筒（潤）か失念
 88：此所風呂先屏風
 89：勝手口
 90：此床ニ名物の一軸定家為家両筆の懸物
 91：大目床
 92：違棚
 93：此所戸一枚滝本鉢植の図
 94：此所ニ屏風一双半有
 95：かた方は古法眼春分の図書也
 96：一双ハ雪村墨絵の山水
 97：懸作高欄
 98：京の方 大仏見ゆる
 （欠落）「高さ二尺二寸四分の上に竹格子二尺二寸四分に四尺二寸六分の窓あり」（場所不明）
- ・（玉潤カ：南宋末元初）
 ・藤原定家・為家父子
 ・滝本坊
 ・狩野元信
 ・雪村周継（1504～89、関東の水墨画）
 ＊京大仏の景観

1) 滝本坊の住持（織豊期、江戸前期）

- ・乗祐：千利休や津田宗及と交流、近衛前久と親交、秀吉の取次（釣灯笼銘：天正 15 年〈1587〉8 月「宿坊滝本坊」「豊臣太政大臣」）、〈天正 17 年秀吉大廻廊造営〉、天正 19 年 2 月 22 日没
- ・実乗：豊臣政権の取次（慶長 3 年奉行浅野長政書状〈大阪城天守閣〉）、山楽・山雪との交友、大坂の陣の避難所、寛永 4 年（1627）2 月 23 日没
- ・昭乗：寛永 4 年住持、近衛信尹一信尋（後陽成天皇の皇子、母は近衛前久の娘・前子、後水尾天皇の弟）一尚嗣、遠州、山楽・山雪、沢庵宗彭、林羅山らと交流、寛永 16 年 9 月 18 日没

2) 滝本坊の客殿・書院・数寄屋〈広間と小間〉

- ・昭乗（1582～1639）と小堀遠州（1579～1647）の合作
 寛永 4 年（1627）昭乗が滝本坊を継承～寛永 14 年（1637）：昭乗が松花堂に移る
 寛永 9 年（1632）完成説（中村昌生）
 安永 2 年（1773）焼失
- ＊書院の障壁・屏風・掛軸：書画の系譜（昭乗の交友関係、石清水八幡宮の相伝品、購入品など）
- ＊閑雲軒：「懸作高欄」（37）「遠州好み」の書院様式の茶室（縁から躡口を入れる）
 遠州伏見六地藏屋敷「長四畳座敷」（『松屋会記』慶長 6 年（1601）11 月 21 日朝茶）
 四畳台目復原図（中村 134 図）
- ＊延享 3 年（1746）茶会：客殿（18 煙草盆・薄茶）→待合（20 阿蘭陀毛氈）→初座・閑雲軒（40 床・飛鳥井雅経懐紙）→後座・閑雲軒（床・竹花入：遠州作、羅漢書付）
 「惣道具内名物」（茶入国師茄子、定家為家一軸掛物 90、碁盤香箱 78）

3) 景観

- ・宇治全景（16）
- ・京都の大仏殿（98）
 文禄 4 年（1595）方広寺大仏・大仏殿の完成
 文禄 5 年（1596）地震により漆喰大仏大破
 慶長 4 年（1599）金銅大仏再建中に大仏殿全焼
 慶長 14 年（1609）再建
 寛文 2 年（1662）地震で大仏大破 大仏殿のこる
 寛政 10 年（1798）落雷で大仏殿焼亡

4) 滝本坊と狩野山楽 (1559~1535)・山雪 (1590~1651)

- ・大坂夏の陣に際し (1615 年)、男山滝本坊 (実乗・昭乗) に身を寄せる (山楽、昭乗『本朝画史』)
- [参考] 石清水境内のアジール (Asyl、独語) 性: 不可侵の聖なる場、避難所 (例『武徳編年集成』)
- ・山楽: 秀吉の小姓、永徳 (1543~1590) の弟子、京狩野の祖、九条幸家の嘆願か、秀忠助命
- ・山雪: 山楽の娘婿、藤原惺窩・林羅山と親交

* 瀧本坊書院障壁画: 狩野派、永徳 (23)、山楽 (25・55)、山雪 (8・10・12・15・19・66)
昭乗・山雪の合作 (11-12) 「金欄大流松」「昭乗筆山雪彩色」

[参考] 山雪筆「俊成・定家・為家像」(和歌賛は小堀遠州、箱書は淀藩士・遠州弟子・歌人
『松花堂行状記』著者の佐川田昌俊) 逸翁美術館蔵

5) 石清水と藤原定家

- ・田中宗清と定家 (日記『明月記』、『新古今』、『新勅撰』、『小倉百人一首』撰者) の親交
- ・滝本坊から流出した定家の書跡: 「八幡名物」貞応元年 (1222) 6 月定家為家兩筆仮名願文 (90)
- [参考] 貞応 2 年 10 月定家筆田中宗清仮名願文 (大・小 2 幅) 山形市慈光明院蔵<小堀遠州箱書>
- ① 天保 2 年 (1831) 12 月滝本坊譲状: 滝本坊→鹿野少式
- ② 明治 3 年正月古筆了仲伝来書: 大願文の相伝、滝本坊→森本閑日庵→赤星家→益田家

6) 本社造営 (公儀普請) と滝本坊

- ・秀吉: 天正 17 年、大回廊の再興 (乗祐期)
- ・秀頼: 慶長 5 年~同 13 年 (実乗期)
- ① 「男山見物、社頭造営秀頼公御沙汰、結構也、柱以下悉墨 (黒) 漆塗テ絵ヲ書也、薪 (薪) マテモ黒漆也、同大塔去年出来云々、本尊薄 (箔) ヲ押也、下ノ重五間也、広大、」(『義演准后日記』慶長 11 年 5 月 17 日条)
- ② 「男山八幡宮昨日正遷宮、如式々云々、社壇右大臣豊臣朝臣秀頼公御造営、元ノ社ハ悉壊テ取去、新結構、葎等黒漆也、彩色等盡善盡美、」(同 12 月 12 日条)
- ・家光: 寛永 11 年 8 月 22 日正遷宮 < 昭乗の尽力 >
- ① 寛永 9 年 10 月 15 日付 小堀遠州宛松花堂昭乗書状 (長浜市・孤篷庵蔵)
- 撰政一条兼遐、京都所司代板倉重宗、淀城主・造営奉行松平定綱らとの涉外

[参考文献]

- 佐藤虎雄『松花堂昭乗』河原書店、1938 年
中村昌生『茶の建築』河原書房、1968 年)
橋本政宣「滝本坊とその文化の源流」(『日本歴史』281 号、1971 年)
矢崎格「諸本集成 八幡滝本坊蔵帳」(『茶湯 研究と資料』7 号、1973 年)
矢崎格「八幡名物の運命”滝本坊蔵帳”記載品の行方」(『日本美術工芸』450 号、1976 年)
中村利則「茶室の変遷」(『名宝日本の美術 16 利休・織部・遠州』小学館、1983 年)
矢崎格・益田孝「松花堂昭乗年譜」(『茶道文化研究』裏千家今日庵文庫、4 輯、1998 年)
『松花堂昭乗関係資料調査報告書』八幡市発行、2002 年
川畑薫「瀧本坊における書跡蒐集と什物目録の変遷」(『芸能史研究』173 号、2006 年)
佐藤恒雄『藤原為家研究』笠間書院、2008 年
中村昌生「遠州の茶室」(『別冊太陽日本のこころ 160 小堀遠州』平凡社、2009 年)
西半野隆「木津宗詮家の総合的研究」(大日本茶道学会一般研究 研究報告 2009・2010 年度)
『石清水八幡宮境内調査報告書』八幡市教育委員会、2011 年
五十嵐公一『京狩野三代 生き残りの物語 山楽・山雪・永納と九条幸家』吉川弘文館、2012 年
成澤勝嗣『狩野永徳と京狩野』東京美術、2012 年
京都国立博物館編『特別展覧会 狩野山楽・山雪』毎日新聞社、2013 年
中川真弓「定家の願文一『石清水八幡宮権別当田中宗清願文案』と『八幡名物』古筆切をめぐって」(『中世文学会平成 28 年度秋季大会資料集』2016 年)
拙稿「石清水八幡宮の牛玉宝印に関する一考察」(『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』8、2017 年)

II 「閑雲軒」指図

鍛代 敏雄

○「瀧本坊数寄屋之図」(金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵「清水文庫」:加賀藩御大工方清水家旧蔵史料〔文化元年<1804>写〕)

1 八幡瀧本坊数寄屋之図

此指図四寸二部(分)一品之図 此スキヤ(数寄屋)山ノ半つりニテ掛作りノ上ニアル故 惣廻リクレエン(樽縁)アリ 庭ナシ 遠景ヲ窓ヨリ 見ル内ハ遠州流本式 三畳タイ(台)ノ須(図)也

2 クレエン(樽縁)

3 客入ノ方

4 常ノ数寄屋ニ而ハ此床土氈(十縁)也

5 此所刀掛

6 上ニ下地マト(窓)

7 レンシマト(連子窓)

8 ニシリ(躡)上リ

9 二尺五寸五部(分)マト(窓)カヘ(壁)

10 奥行 二尺三寸 タナ(棚)

11 カヘ(壁)

12 臥(伏)タケ(竹)

*蒲鉾竹カ

13 三尺近クヤ子ウラ(屋根裏)

14 レンシマト(連子窓)

15 二畳

16 タナシカ

*棚仕立カ

17 フキヌキ(吹抜)

18 勝手二畳敷

19 火トウ(灯)

*火灯口(給仕・勝手口)

20 茶道口

21 ヒラキ(開)戸

22 赤松

23 竹

24 シキシマト(色紙窓)

25 竹柱

26 風呂之マト(窓)

27 下地マト(窓)

懸け造り

— 「空中茶室」 シンポジウム —



日向 進

日向 進 氏 資料

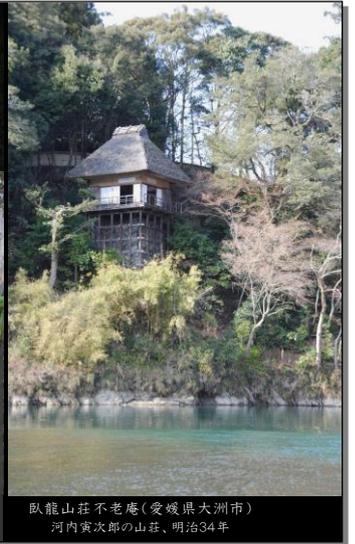
【懸造 かけつくり】

山または崖に持たせかけ、或いは川の上にかけて渡して建物を造ること。また、その建物。崖造(がけづくり)。(『広辞苑』第二版補訂版)



【Caquezucuri カケツクル】

片方はしっかりした所に、片方は低い所とか険阻な所とかに[かけて]造った建築、たとえば海とか絶壁とかなどに臨んで造った建築。(『日葡辞書』慶長8年(1603))



臥龍山荘不老庵(愛媛県大洲市) 河内寅次郎の山荘、明治34年

「かけつくる」

「カケツクリタル縁ノキハ(際)ニタチタレハ…地ヨリ空ニノホルニニ(似)タリ」(明恵上人(1173-1232)の歌の前詞)

→ 榎尾高山寺背後の楞伽山に営んだ座禅修練のための草庵(縁の床下部分が長い柱によって支えられていた)



「かの夕霧の宮す所(御息所)のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山に片懸けたる家なれば」(『源氏物語』)

→ 山里よりさらに山奥の横川僧都の妹尼の住まい

「みのおやま雲かけつくる峯の庵は松のひびきも手枕のした」(鴨長明(1153-1216))

(鴨長明(1153-1216))

→ 箕面山: 遊行僧が修行する山、修験の行場

「懸作タル房ナレバ、谷底へ(袈裟を)投入畢云々」(『古事談』建暦2(1212)~建保3(1215))

(『古事談』建暦2(1212)~建保3(1215))

→ 無動寺の上人の住房=板敷きの穴から足を踏み外すと命もあぶない



三仏寺奥院(投入堂)

水木しげる『雨女』より

笠森寺 観音堂
 四方懸造
 (1597年、千葉県長生郡)



臥龍山荘不老庵
 明治34年(1901)
 棟梁:中野虎雄



如法寺毘沙門堂
 明治41年(1908)
 棟梁:中野虎雄



大洲の懸け造り



少彦名神社参籠殿
 昭和9年(1934)
 棟梁:中野良次(虎雄の弟)
 設計:中野文俊(良次の養子)

すくなひこな

少彦名神社参籠殿

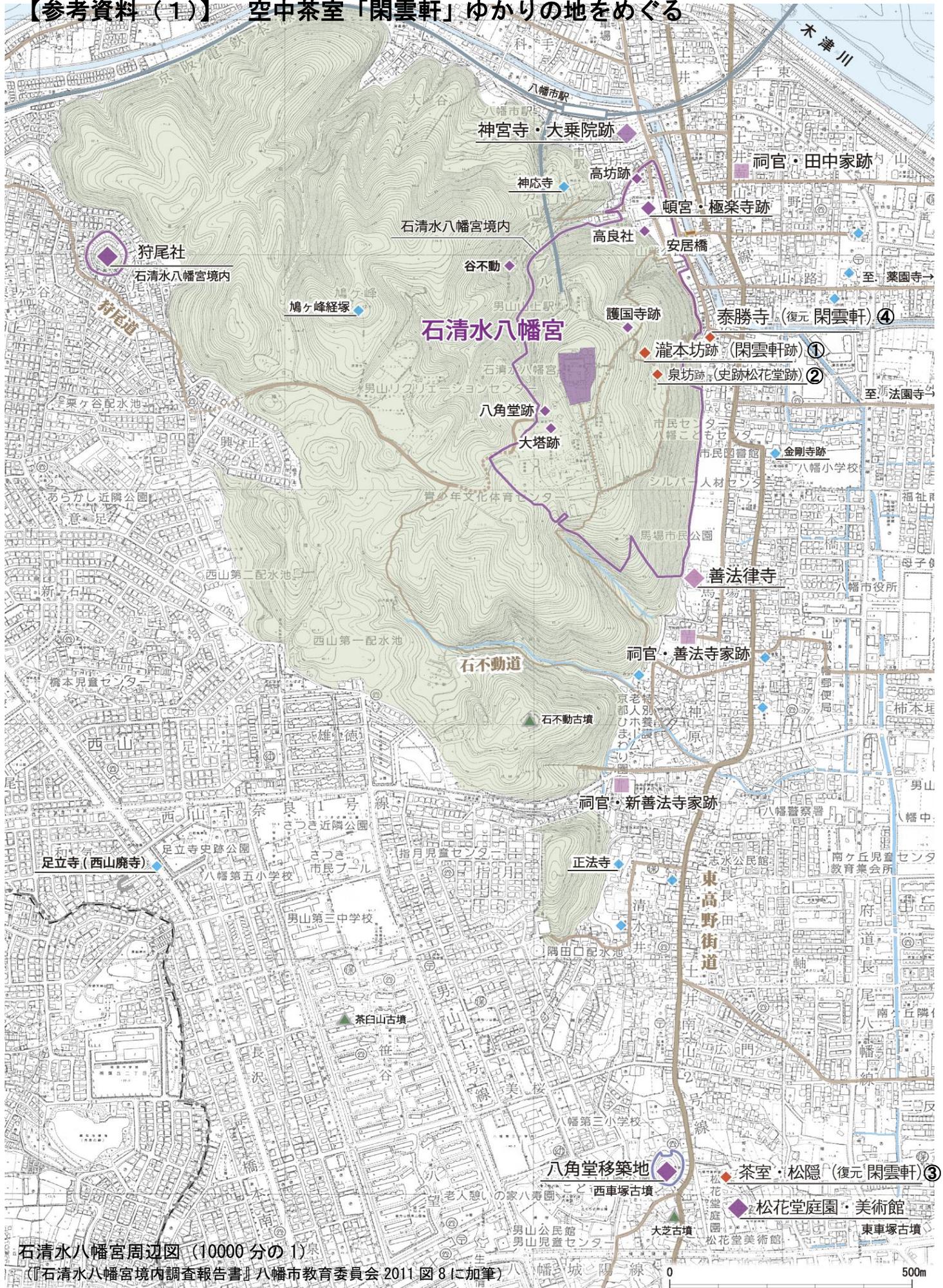
危機遺産リスト(ワールドモニュメント財団2014年版、世界67ヶ所)



神応寺 茶室(雲歩堂)跡地



【参考資料(1)】 空中茶室「閑雲軒」ゆかりの地をめぐる





史跡 石清水八幡宮境内 江戸時代中期の坊跡位置図 (2500分の1)
 (『石清水八幡宮境内調査報告書』八幡市教育委員会 2011 図 13 に加筆)

① たきもとぼう 瀧本坊の跡（石清水八幡宮境内）

「閑雲軒」がかつてあったのが、瀧本坊です。

瀧本坊は、神仏習合の宮寺であった石清水八幡宮の山の中に、中世以降、明治時代初年まであった寺です。江戸時代初期に「寛永の三筆」の一人と称された松花堂 昭乗しょうかうどうしょうじょうが住職をつとめ、有名になりました。松花堂昭乗は「松花堂弁当」の由来としても現代では有名ですが、書面だけでなく茶人の大成者でもありました。江戸城など幕府の数々の建築を手掛け、将軍の茶道師範でもあった小堀遠州こぼりえんしゅうは昭乗の親友で、この瀧本坊には遠州と共に造った茶室「閑雲軒」があり、詳しい絵図面も残されています。

平成 22 年の発掘調査では、昭乗の没後、江戸時代中期に焼亡した後に再建された建物の様相が明らかになりました。南の玄関側には本堂があり、北には平坦面の中央に漆喰つくりの瓢箪型の池を確認しました。さらに、絵図をもとに東の崖の斜面を調査した結果、建物の柱を支えた礎石の列が 30m 以上に渡って見つかり、懸け造りの客殿があったことがわかりました。閑雲軒は、7 m もの柱で支えられ、茶室の床面のほとんどが空中に迫り出した「空中茶室」ともいうべき構造であったことが判明しました。

年 号	西 暦	事 象	典 拠
長禄 2 年	1458	足利義政参詣	『男山考古録』
慶長 3 年	1598	17 歳の昭乗が瀧本坊実乗のもとで社僧となる	『松花堂行状記』
寛永 4 年	1627	実乗死去により瀧本坊住職となる	『松花堂行状記』
寛永年中		小堀遠州と共に瀧本坊に閑雲軒をつくる	『松花堂行状記』
寛永 14 年	1637	松花堂昭乗、泉坊「松花堂」に隠居	『松花堂行状記』
安永 2 年	1773	焼亡後再建	『男山考古録』
明治初年頃		破却	

寛永期以来の様子



石清水八幡宮境内全図 [石清水八幡宮蔵]
◆寛延 4 年 (1751)

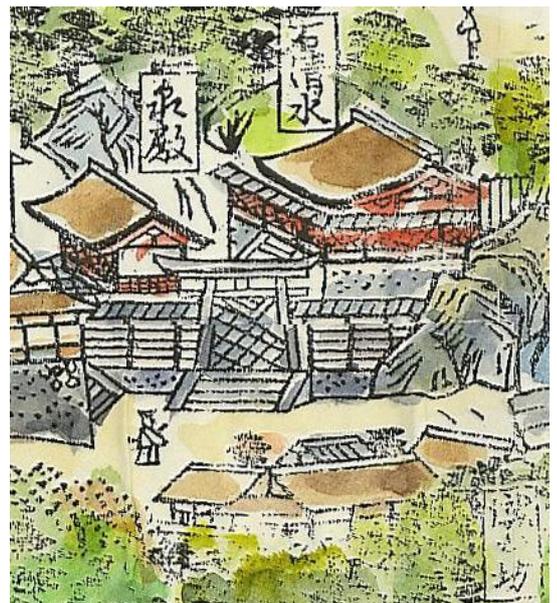
焼亡後再建の様子



石清水八幡宮境内図 [石清水八幡宮蔵]
◆文化 11 年 (1814) 頃か



細見男山放生会図録 [石清水八幡宮蔵]
◆文政 8 年 (1825)



城州八幡山案内絵図 [個人蔵] に着色
◆慶応 2 年 (1866)

いずみぼう
② 泉坊の跡(石清水八幡宮境内)

松花堂 昭乗は現役時代、石清水社の隣の「瀧本坊」の住職でしたが、引退したのち、この泉坊に庵を建て、「松花堂」と名付けました。

明治初年の神仏分離令で、男山からすべての坊が撤去されることとなり、ここから約2km南にある現在の松花堂庭園・美術館の地に、草庵・松花堂と泉坊書院は移築されました。昭和32年にはこの地と移築先の2カ所が「松花堂およびその跡」として国の史跡指定を受け、昭和57・58年には整備のための発掘調査が行われました。

草庵・松花堂の手前で発掘された庭（露地）の遺構は、昭乗亡きあと江戸時代後期に造り直されたものですが、絵図にびたりと一致するもので、現地に露出展示されています。



泉坊 跡で発掘された遺構の位置
(石清水八幡宮『史跡松花堂およびその跡 整備事業報告書』1986 図-1をトレース)



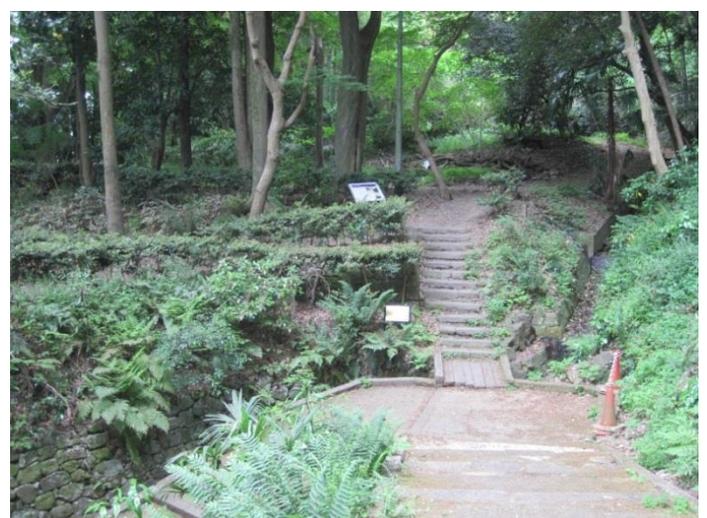
松花堂庭園 内園にある草庵 松花堂



松花堂庭園 外園にある泉坊書院



史跡石清水八幡宮境内 瀧本坊跡 現況



史跡石清水八幡宮境内 泉坊跡 現況

③ 松花堂庭園 茶室・松隠^{しょういん}

梅隠の西北、美術館別館のすぐ東に、南向きに建つ茶室です。入母屋造銅板葺の屋根に庇^{ひさし}がつき、床の高い建築で、ほどよい勾配の屋根と、均整のとれたおだやかな^{たなす}佇まいで、中村昌生氏（松花堂美術館名誉館長）により設計されました。玄関、八畳の広間、四畳台目の茶室と水屋からなり、茶室は「閑雲軒」を再現したものです。

かつて石清水八幡宮にあった「閑雲軒」は、瀧本坊の本堂と書院座敷のつぎ目に位置し、本堂の広縁^{ひろえん}を待合に利用し、その端に手水所があり、そこからさらに吹き放しの縁を通して^{にじりぐち}躡口から席入りするようになっていました。つまり縁側が露地に使われていたのです。茶室は崖の上につくられ、三方に吹き放しの縁が回らされていました。この縁から眼下に風景を眺めることができたのです。そのようなこの茶室の珍しいあり方を、少しでも再現するために、ここでは建物のゆかを高くし、茶室の三方に縁を回らし、縁からにじり入る形式がそのままに採用されています。また、窓が多いのも特徴で、屋根裏の突上窓を含めて全部で十一窓あけられています。



松隠の外観。正面に書院、茶室は裏手にある



茶室・閑雲軒の内部

④ 泰勝寺^{たいしょうじ} 閑雲軒

京阪電車八幡市駅から南へ徒歩約5分、社僧・松花堂昭乗ゆかりの寺。もとは昭乗や瀧本坊住職の墓地があった場所で、荒廃を惜しんだ臨済宗妙心寺派の神月老師の尽力のもと、当代有識の文化人らが「松花堂保存会」を結成し、大正7年に建てられました。本堂の奥に墓地が整備され、中央に昭乗、向かって右に昭乗の師・実乗、左に弟子の乗圓の墓石があります。寺号の「泰勝寺」は、熊本市にあった細川家の菩提寺、泰勝寺から受け、本堂正面の方丈の額は九州より移されたもので、南宋随一の能筆家とされる無準師範の真筆です。

戦前、当寺において、昭乗が愛用していたタバコ盆（絵具箱とも）を点心の器として使用しており、松花堂弁当が広まることになったと伝わります。寺には宝物館や茶席があり、茶席の「閑雲軒」は、日本の百席の一つに数えられています。※拝観は指定日のみ、事前予約が必要。



泰勝寺（北から撮影。奥が本堂、下が松花堂墓地、右が茶室）



泰勝寺にある茶室・閑雲軒の内部

【参考資料（２）】八幡市駅前整備等観光まちづくり構想（抜粋）

策定趣旨

八幡市では、平成28年2月に「八幡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、「世界から関心を集める観光都市・やわたへのチャレンジ」として、国宝石清水八幡宮を活かした交流拠点づくりや、周遊・体験・滞在型の広域観光を推進していくことを目的としている。また、その実施計画の一つとして、平成28年3月に『『お茶の京都』八幡市マスタープラン』を策定し、石清水八幡宮、松花堂庭園及びやわた流れ橋交流プラザ「四季彩館」を戦略的交流拠点として位置付け取組を進めていくこととしている。

このような背景のもと、本構想は、上記の戦略的交流拠点の一つである石清水八幡宮の玄関口にあたる八幡市駅前周辺を目指すべき姿について、市民や関係団体とともに、世界から関心を集められるブランド・コンセプトをつくとともに、観光地としての持続可能なビジネスモデルを含めた事業計画等をまとめるものである。

観光まちづくりの方向性について

協議会・ワーキングにおける意見等

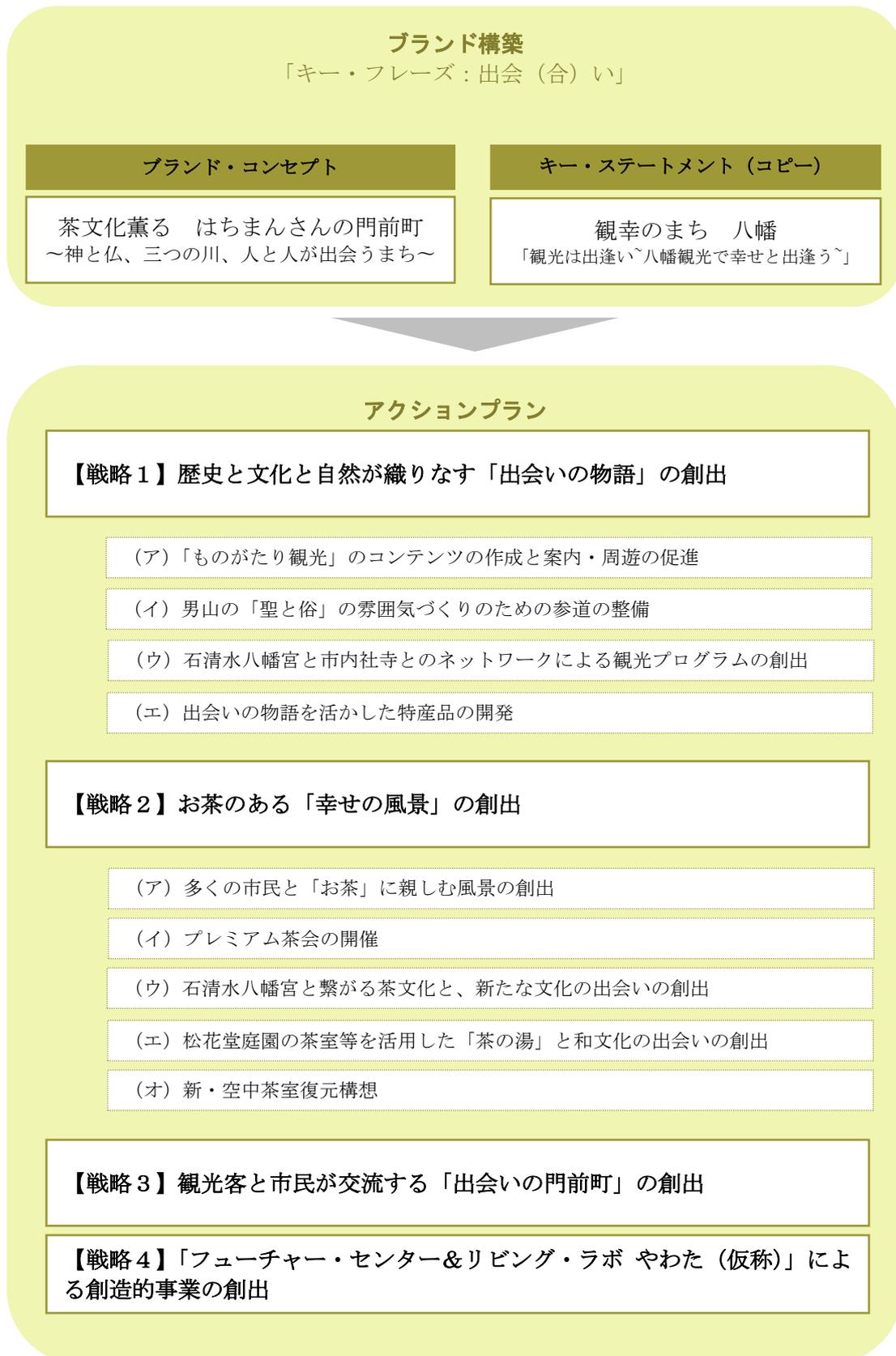
○ 本構想の策定にあたり、市民及び関連団体等で構成する「八幡市「お茶の京都」交流拠点づくり推進協議会」と3つのワーキンググループ(八幡市駅前整備等観光まちづくり構想 WG、新・空中茶室復元構想 WG、特産品開発 WG)により議論を進めてきた。計4回の協議会及び、各5～7回のワーキンググループで出された主な意見は次のとおりであった。

図表 2. 協議会・ワーキンググループでの主な意見

分野	主な意見
茶文化の継承、発展に関して	<ul style="list-style-type: none"> 八幡は、お茶の作り手より、使い手・文化の担い手であり、茶文化を発信する必然性がある。 八幡には、今も茶文化が生きている。現代に合った形で発信することが魅力の向上につながる。 八幡の茶文化は、松花堂昭乗の存在が大きい。茶道はインテリジェンス（見立ての一ひねりで感動を与えること）が重要であり、昭乗は上手だった。現代観光にその要素を組み込み、プログラムを生み出すことも可能だろう。 八幡に庭園が見えるお茶室があるのは独自の地域資源。本格的な茶会の開催など、有効活用が必要である。 八幡の子供たちが茶文化に親しめていない。茶文化に触れ、知るための教育が重要。
空中茶室の復元にに関して	<ul style="list-style-type: none"> 空中茶室からイメージするのは懸造りであるが、必ずしも形に拘らなくてもよいのでは。 復元場所は、男山の山上、山下の参道・頓宮・駅前・松花堂等、様々な場所が考えられる。茶室はその場所と環境によってしか成立しないので、場所が決まらないと建物のあり方は見えてこない。 まちなかを露地と見立て、気軽に茶の湯が楽しめる場所を形成していくべき。 まずは仮設かつ移動可能なもので実験を行うことから始めては。 市民に日常的に親しんでもらうための交流や周遊の拠点として、「まちなかカフェ」をつくるのも良い。 建築物を急いで決めるのではなく、今後、より多くの市民を巻き込み議論を深め、ムーブメントにしていく必要があるのではないか。 来訪者に「清らかな心」「無の心」になっていただける場を作っていきたい。 神仏和合の八幡さんの特徴を世界に発信できる茶室として実現したい。世界要人が平和の対話をしに訪れる、世界平和の象徴となるような場所にできないか。

ブランド構築の実現に向けたアクションプラン

ブランド構築に向けた「4つの戦略」と施策展開



(オ) 新・空中茶室復元構想

石清水八幡宮境内にかつて存在した、松花堂昭乗ゆかりの坊の一つ、「瀧本坊」跡で、平成 22 年に、「空中茶室」と呼ばれた懸け造りの茶室「閑雲軒」の遺構が発見された。この「閑雲軒」を復元し、八幡市の観光誘客、さらには茶文化の発信のための資源として活用していくことが望まれる。

ただし、単なる復元ではなく、現代に生きる我々にとって重要な意味を持つ「新・閑雲軒」を創造するため、企画・設計した松花堂昭乗と小堀遠州らの思いや八幡の茶文化のあり方を考察し、本質を追求していくことが重要であると考えます。

当時の茶文化における本質を捉まえ、「時間」を超えて、過去の先人達が見た情景を現代においても想起することができ、また、場所の特性から新たな「空間」を創り出すなど、独自の新・空中茶室構想を進めていきたい。

今後、イベントやシンポジウム等を通じて市民主導で多角的な議論を進め、市民の間で茶文化のムーブメントを起こし、広く市民の間で語り合うことによって復元の機運を高めていくこととしたい。

以下の「ディスカッションノート」は、新・空中茶室復元構想ワーキンググループにおいて、「空中茶室」の新たな“かたち”について提示したもので、今後の新・空中茶室復元構想の議論の基礎となっていくことを期待したい。

WGでのディスカッションノート① ～茶文化と茶室～

日本における茶文化は、様々な要素から成り立つ総体としての文化と言える。菓子、食、器、花、空間（建築、風景、環境など）、思想との深くつながり、日本流のおもてなし等、物質的なものから精神的なものまで幅広く例が挙げられる。時代とともに変化しているものもあるが、今なお受け継がれているものもある。

それは、茶文化が、個々の要素から成り立つ総体としての文化であって、個々の変化を柔軟に受け止めることができる「おおらかさ」を持っているためである。この中で茶室は、茶文化を構成する要素のひとつではあるが、あくまでも部分的なものとして捉えられる。他の要素と密接に結びつくことで、特徴のある独自の空間が生まれる。茶道具や床の間の掛け物は個々の美術品である以上に、茶室に至るまでの風景、お茶を淹れる所作、客を迎え入れるおもてなしの心といった要素によって、茶事として進行する一体的な時間が創り出され、「時間そのもの」が総合芸術となる。

WGでのディスカッションノート② ～時間×空間のトポロジー～

茶文化のもつおおらかさは、トポロジー（※）という概念にも似ている。

（※トポロジーとは、図形に平行移動や拡大・縮小、鏡写しなどの変更を加えた写像の意。）

つまり、条件を満たせば、一見別物に見える事柄を同じものとして見なす事ができるというものである。茶文化における本質を捉まえる事ができれば、「時間」を超えて、過去の先人達が見た情景を現代においても想起させることができる。さらに、場所に応じた特徴を引き出し、新たな「空間」を創り出すことで、独自の新・空中茶室が生み出される。お茶をいただく空間として考えられるあらゆる可能性の中では、いわゆる空間としての茶室という形態を必ずしも必要としないかもしれない。これが、「時間×空間のトポロジー」である。

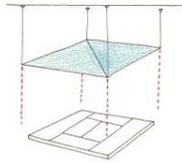
WGでのディスカッションノート③ ～空中茶室についての試案～

当時「閑雲軒」を訪れた人は、崖から跳ね出した懸造の縁側を通り茶室に入っていった。男山の天蓋の様な木々の隙間から覗く空が大きく開け、山下の風景とともに遠くまで見渡せる光景が広がる様は、独自の浮遊感を来訪者にもたらしたのではないかと思われる。

新・空中茶室を考えるに当たり、上記のような閑雲軒を取り巻く環境についての観点、茶室を構成する建築的観点、茶文化を構成する要素の観点といったいくつかの観点から、着想を得て、発想を広げていくことが望ましい。

以下は、空中茶室のあり方を含め、新たな「空間」を創るための発想や着想を得るためのコンセプト試案である。

吊るす



<コンセプト試案①>

空中茶室の持っていた浮遊感を想起させるため、屋根を「吊るす」。本来は頭上を覆っている屋根や壁までもが軽く吊るされ、重力から開放された様な感覚を得ることができる。

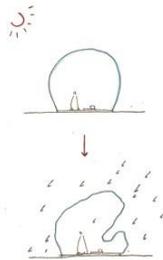
森に浮かぶ



<コンセプト試案②>

茶室そのものが、男山を形作り、「森に浮かぶ」ことで、男山という環境と密接な関わりをもった空間が現れる。

環境によって変化する

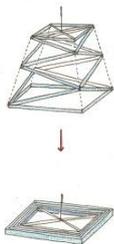


<コンセプト試案③>

茶室を始めとした一部の日本建築の形態や仕組みは、日本という風土環境に適応した結果として、現代で言うところの仮設建築物のような構造であった。

建築物が「環境によって変化する」ことを特徴として捉えれば、男山という環境と一体となった茶室空間が生まれる。

折りたためる



<コンセプト試案④>

茶室があたかも「折りたためる」かの如く持ち運び可能となり、茶会を始めとした一時的な催事と連動した茶室の建立・造営が可能となる。

環境に適応する



<コンセプト試案⑤>

空中茶室は、床を地面から大きく持ち上げる懸造の構造によって空中茶室が男山の急斜面という環境に適応し、独創的な茶室空間を創り出している。

男山だけでなく、いくつもの異なる「環境に適応する」
ことができれば、茶文化の精神を色々な場所で体現
することができる。

空を飛ぶ



<コンセプト試案⑥>

空中茶室という言葉によりいっそう率直に表すのが
「空を飛ぶ」というコンセプトである。

茶室自体があたかも空を飛ぶかのように、空中という
新たな環境に適応させる。

茶畑を持ち歩く



<コンセプト試案⑦>

日本文化に根ざした茶文化の世界への発信にあわせて、茶文化を形作る要素のひとつである茶室も世界に発信
されるべきではないだろうか。

ここでは、「茶畑」をひとつのキーワードとして、茶室と組み合わせて考えてみたい。畑には土地が必要だが、空中茶室のもつイメージから「茶畑を持ち歩く」というところに発想を転換する。

茶畑をつなぐ



茶畑をきっかけとして、石清水八幡宮を起点に様々な
茶文化の交流を生み出すことができる。このようにして
世界の「茶畑をつなぐ」ことができれば、日本の茶道そのものを創造的に発展させていけるのではないか。

【戦略4】「フューチャー・センター&リビング・ラボ やわた（仮称）」による創造的事業の創出

観光は、観光資源、交通、飲食、物販、宿泊等の多面的な要素をあわせ持つ産業であって、観光産業の振興には、横断的に協力・連携を図り、総合的、体系的に地域経営を推進する体制が必要である。

広域的な観光地域づくりの舵取り役となる「お茶の京都DMO」が設立されたが、「お茶の京都」における本市の位置づけを踏まえ、本市独自の付加価値を高めるために、市民や事業者など、付加価値の提供主体となる者が自由闊達に議論し挑戦と検証を行う場として、「フューチャー・センター&リビング・ラボやわた（仮称）」の創設を目指したい。

なお、八幡市における「フューチャー・センター&リビング・ラボ」は、欧米を中心に広がっている考え方をベースに、地域内の協調を大切にしながら、地域内外の多様な関係者を集めて創造的な議論を行い、バックキャスト¹によるアイデアの創出から、プロジェクトの結成、事業モデルを創出まで、地域の文化や実情に適合した運営を行っていきたい。

なお、運営主体は、将来的には民間と行政が協力・補完し合いながら、まちづくりを行う組織を立ち上げることも考えられるが、当面は、本構想策定に参画をいただいた関係者（協議会・ワーキンググループメンバー）の支援や協力を得ながら、特定非営利活動法人、社団法人又は財団法人等の民間主導により実施していくことが望ましい。

まちづくりWGでのディスカッションノート⑥

～八幡市ならではのフューチャー・センターのあり方～

「フューチャー・センター」とは、“未来の新しい仲間を招き入れ、創造的な「対話」を通して、未来に向けての「新たな関係性」と「新たなアイデア」、「協働」を生み出すためのハード・ソフト両面における“場”のことである。1990年代に北欧で創設されて以来、欧米を中心に広がり、日本各地でも運営されている。

「フューチャー・センター&リビング・ラボ やわた（仮称）」では、八幡市の地域内の協調も大切にしつつ、内外の多様な関係者を集め、対話を基本としながら、その時、その場にしか起こり得ないメンバー同士による共創を目指す。

まちづくりWGでのディスカッションノート⑦

¹単なる予測・フォーキャスト（Forecasting）とは異なり、求められる理想の未来像から現在を眺める方法である。未来像、あるいは理想の状態から現在の課題を認識するという方法自体は、昔から存在しているが、この方法をバックキャストと名付けたのは環境学者であり、未来学者であったJ.Robinsonである。

～八幡市ならではのリビング・ラボのあり方～

「リビング・ラボ」は、フューチャー・センターを補うものとして、実際に人々が生活するまちのなかで社会実験を重ねる取り組みを指す。異種複数の企業や住民参加を基本とし、構想・開発・評価を繰り返しながら、サービスや製品、施策などを創っていくものである。多くの場合、外部に対しても開かれた場として設置され、内外の知恵を活用しながらイノベーションの創出を目指す。リビング・ラボは1990年代に米国で生まれ、2000年前後から北欧を中心に世界中に広がった後、日本でも企業を中心に開設されている。しかしながら、日本で行われているリビング・ラボには、企業や行政が主体となって発展したものが多く、

「フューチャー・センター&リビング・ラボ やわた（仮称）」では、あくまでも市民を主役とし、市民自らの創意や想いの発現を最重視して、全く新しいまちづくりの実験を行う場としてのリビング・ラボを設置・運営を目指す。

まちづくりWGでのディスカッションノート⑦

～「フューチャー・センター&リビング・ラボやわた（仮称）」の活動～

1. 準備・初期段階（平成29年度～）

民間団体の主導により、市民、地域の事業者（商工会）、観光協会、学生、八幡市、近隣自治体、京都府、国など、広く支援と協力が得られ、創造的な議論ができる場の設置を目指す。また、物理的なまちづくり拠点を設置することも検討する。

具体的には、設置した拠点等を活用し、定期的にワークショップ等を開催し、参加者自らが発案する事業やサービス等について、継続的な議論を通じて具体化していく。フューチャー・センターの名のとおり、自由な発想を広げるために様々な分野の関係者を巻き込み、本構想の実現のため、協働してアイデアの洗練化を図る。また、リビング・ラボの名のとおり、アイデアは机上で練るばかりでなく、スモール・スタートで試して実際の効果を測ってみる。

また、市民自身が八幡の価値を再認識し、八幡の魅力を自ら発信・伝達することこそが、まちづくりには重要であるとの指摘がなされたところであり、市民自らが学び体験し、より八幡の価値を引き出して高められるような講演会や勉強会、体験会などを企画していく。

さらに、付加価値のあるサービスを創出するためには、新たな事業者の育成や、外からの事業者の迎え入れが必要不可欠となる。これらを実現するために必要となる「事業を担う人づくり」、「人を集める求心力を持ったまちの魅力の向上」、「創業テーマの創出」について、積極的に内外の若年者の参加を促しながら、民間と行政の協働と連携により、創業支援の仕組みを作っていく。